音楽部会

“音楽すること”から　ひろがる・深まる

１　研究の内容

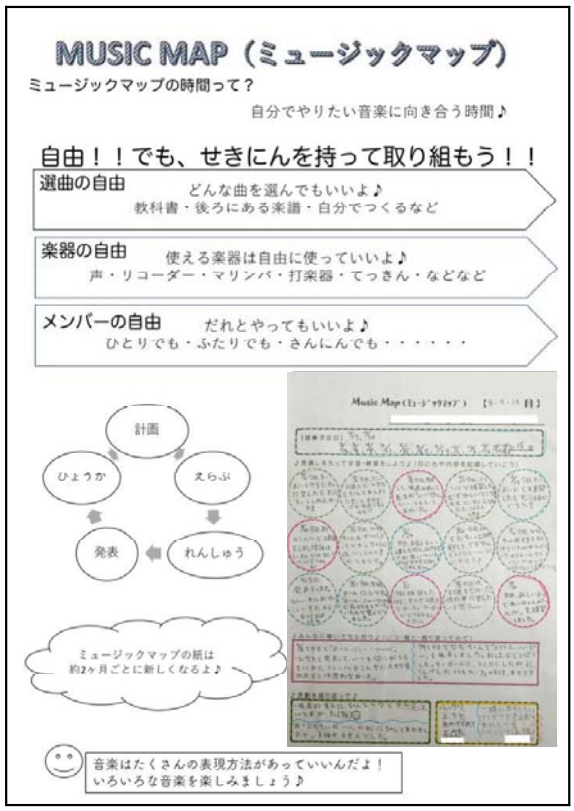
ニュージーランド出身のクリストファー・スモールが提唱した，「musicking」*1 という考えがある。本校音楽部では，この考えに賛同し，実践を続けている。どんな形であれ，音楽に関わる姿勢を育むことを第一に考え授業展開や実践をしてきた。子ども一人ひとりが「音楽すること」を実感し，自らが音楽と向き合いたいと思えるような場の設定や教材の工夫を重ねてきている。中でも４年生から６年生まで継続して設定している「MUSIC　MAP」という時間がある。この時間においての子どもたちの姿からは実にたくさんの学びをあむ姿が見てとれる。（実際の姿は後述する。）本研究テーマのもと，毎年子どもの姿から変容や成長を考察してきた。５年目における本年度は，相変わらずの感染症対策下での活動ではあったが，第６学年においては，一斉活動はほぼ設定せず，ミュージックマップの時間に費やしてきた。そこから見えてきた子どもたちの音楽に関わる姿勢や変容から省察するだけでなく，音楽をあみ直していく過程こそがメタ認知スキルや社会情動的スキルを育めると捉え，本研究を進める。

ここで「musicking」と「ミュージックマップ」について触れておく。

○「musicking」：スモールは，このミュージッキングを，音楽する（to　music）という動詞の，動名詞形であると定義している。「音楽する」とは，どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加することであり，これには演奏することも聴くことも，リハーサルや練習も，パフォーマンスのための素材を提供すること（つまり作曲）も，ダンスも含まれる。とスモールは言う。まとめると，各自の立場を問わずに音楽的なパフォーマンスに加わるすべてのものが，「音楽すること」なのである。チケットの売り子や，掃除係など，裏方まで，その場に集うすべてのものが音楽に参加し，音楽を共有し，音楽に貢献しているという考えである。

○「ミュージックマップ」

４年生から６年生では，自分たちで音楽活動を創りあげる「MUSIC　MAP」の時間がある。この時間は，自分（たち）の音楽を追求する時間と言ってもよい。自分の音楽活動をデザインし，マップを見直す中で，修正をかけることもあれば，さらに深い学びにつながることもある。さらには一人ひとりのマップが，大きな学習材に変化することもあるのだ。１時間の中の学びを，少しずつ形を変えながら次時に活かして活動していることもわかっている。４・５年生では，様々な音や楽器に触れる機会を多く設ける。その中で，自らが音楽と向き合い，試しながら楽しむ姿が多く，次第に自分のこだわりを見つけていく。６年生になると，楽器の選択の幅も広がり，ドラムやギター，ベースなどに興味を持ち始める子が多数出でてくる。たくさんの選択肢の中から，自らが音楽と向き合い，試行錯誤しながら進めていく姿が多く見られる。次第に自分の追求すべきものと出会い，没頭する姿が多い。また仲間とともに奏でる喜びや，難しさを，その時その場にいる仲間とともに共有し，さらなる活動へとつなげていく姿もある。



map には地図，天体図，星座図，図解，図表といった様々な意味を含んでいる。ミュージックマップを仮に音楽図とするならば，この時間は子ども自身が自分の音楽史を創っていく大切な時間と言い換えることができるのではないか。

２　授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿　～６年生の実践を中心として～

（０）読譜が音楽苦手意識をつくる？

「僕，音楽苦手なんだよね。」これは，ある児童のつぶやきである。とっさに「どうして？」と聞き返した。「楽譜が読めないもん。」

このやりとりから，改めて，音楽と向き合う身体を育んでいく学校音楽の場での「五線譜」のあり方について考えさせられたのである。実は，五線譜にドレミを書いてほしいという申し出は，学年問わず多くある。「楽譜が読めない＝音楽が苦手」という意識が多くの子どもの中にあるのではないかと立ち止まって考えることが出来た。同時に五線譜の存在が大きすぎるのではないかとも考え始めた。もちろん読譜は慣れも必要ではある。読めて損をするものでもない。ただ，学校の授業の中で，子どもは表現したい楽曲が目の前にあるのに，読譜させることによって，その思いを阻む要因となっていることも事実である。子どもが「やりたい。」という事を実現させるための一助として，教師の介入が必要であると考えている。事項以降実際の子どもの様子を紹介する中で，有用性を表せればと考えている。

（１）五線譜ありきからの脱却

５年生の時から，マリンバに没頭している H。５年生の時は，「スーパーマリオブラザーズ」の場面ごとの演奏を楽しんでいた。音楽室には，スーパーマリオブラザーズの楽譜があり，H は見える位置に置いてはいるが，一度も五線譜を頼ろうとはしなかった。そして，６年生になってもその姿は続いているのである。では H がどのようにして，習得していったのか。H は見ることから始めた。自分の頭の中には，メロディラインがイメージされているのであろう。教師が模範する様子をじっと見つめ，一緒に試す。これを繰り返していったのである。ワンフレーズを一時間かけて何度も何度も試し，覚えていった。叩く中で，自分の思い描いている音やリズムとズレが生じる場面もある。このような時，自分の納得いくまで（自分のイメージしているメロディラインと合致するまで）試して聴いてを繰り返しながら習得していったのである。実に時間のかかる事のように見えるが，H にとっては，毎時間の積み重ねが貴重な時間となって蓄積されていったのではないか。繰り返しになるが，完成させることに意識が強くなることは避けたいと考えている。H にとって，毎時間のこつこつと積み重ねた経験が，次への音楽活動への架け橋となっているのである。

音楽会が終わっての H は，友だちに教えていた。音楽会で演奏した曲を実際に演奏しながら少しずつ伝えている姿があった。このようにある一人の音楽的営みが、違う一人の営みへとつながっている姿からは，同等な他者の存在が大きいだろう。すなわち，学校音楽だからこそ生まれる姿と言ってもよいと考える。

（２）タブレット端末を用いて～YouTube等の動画活用～

本校の児童用ネットワークはフィルタリングがかけられており，YouTube 等の動画サイトは閲覧することが出来ない。しかし，教員管理の下，教員ネットワークにつなげてある iPad が数台ある。

ある日，ある子が，「〇〇の曲のこの部分を聴いて確かめたいことがある。」と申し出た。iPad を貸し出すと，該当曲を検索し，すぐに確認する姿があった。前述した（０）や（１）にもつながることだが，視覚・聴覚をフル活用して，さらには，自分の思い描いていたものとのズレを少しずつ修正していく姿であった。

①ドラムに没頭する姿から

I は６年生になり，毎時間ドラムに挑戦し続けていた。はじめは手も足も同時に動き「難しいーー！」と叫んでいたが，次第に手足が分離し始めた。ある程度８ビートがたたけるようになると，「他に何かない？」と尋ねてきた。キックのパターンを変えたり，リフを入れたり，スネアのパターンを変えたりと色々出来ることを伝えると，自分なりに試し始めた。その後，I は iPad を活用し始めるのである。電子ドラムに iPad をつなぎ，ヘッドフォンをしながら，いろいろな曲に合わせて叩いている姿がしばらく続いた。既存の楽曲に合わせて叩くことで，自分もその世界に入り込むことが出来た。メディアの力を借りつつ，徐々に自分のモノとしていく一つの姿ではなかろうか。

②五線譜ではなく「シンセシア」を活用して

五線譜が全く読めなくても，鍵盤楽器を演奏することは出来るということを気づかせてくれた一つの事例である。YouTube 上には，様々な楽曲のシンセシア動画がアップロードされている。M と Y はそれらをうまく活用し，自分のやってみたい音楽に取り組み続けている。キーボードの譜面立てに iPad を設置し，落ちてくるバーに合わせて打鍵していく。時に再生速度を調節しながら，少しずつ習得している。メロディやリズムは，自分たちの中で理解している。実際に楽器から出ている音とそれらを合わせていく作業をしているのではなかろうか。これも，自分の耳を駆使して音楽と向き合っている一事例と言えよう。

③アーティストが歌ったり踊ったりしている姿を重ねて

T は毎回と言っていいほど iPad を借りに来る。T はもともと歌が大好きで，過去にも自分が取り組んできた歌を定期的に発表していた。毎時間あるアーティストの MV をじーっと見つめ，身体全体で楽しんでいる様子が伺えた。教師が「何回も見ていて飽きないの？」と問うと，「今日はここの振り付けを研究しています。」との解答があった。T にとっては，歌うことだけが音楽ではなく，振り付けや動きも含めて音楽として捉えているようだ。様々な要素が一つとなって，T の音楽観は形成されているのである。また，そのアーティストに重ね合わせるだけでなく，自分らしい歌い方も研究していた。ただ iPad で YouTube を観ているだけにもとられかねないが，そこには，T の学び場が存在していた。これは自分なりの目標を持って活動していた姿と言ってもよい。教材を自分で選択できるこの活動の価値と言えるのではないか。

（３）全校音楽会（練習～本番～振り返り）

昨年度は中止となってしまった全校音楽会。今年度は，例年とは違う形ではあったが，開催することができた。５・６年生のみの発表で，それ以外の子どもたちは，聴衆として参加した。場所も大学講堂から小学校校庭に変更され野外での発表であった。本番を迎えるまでの子どもたちは，実にてつがくしていたと捉えている。演奏する曲やメンバー，使用楽器も自分たちで考え，ベースとしての楽譜はあったが，どのような構成（アレンジ）にしていくのかは子どもたちに委ねた。練習をしていく過程で，「ここはこうしようか。」「終わらせ方はどうしよう。」「もっとこうした方が。」など，たくさんの考えを出し合う姿があった。音楽とどう関わって学びを構成していくのか。その営みが大切なのだと言える。

音楽会後の振り返りからは，次のような事が言えるのではないか。

それぞれのグループの取り組みや本番までの活動の様子，ひとつの作品を創りあげていく過程から見えてきた学びのスパイラル，客観的に自分たちの演奏をみて，気がついたことやこれから活かせそうなこと。約 3 ヶ月の取り組みの中で，自分たちの音楽を更新し続けてきた様子が伺える。あるときは自分と向き合い，あるときは他者を意識し，あるときは聴衆を意識しながら音楽活動を創りあげてきた。まさに，学びの構築過程に音楽ならではの自分をメタ的に捉えることができているシーンがある。これは，学校音楽が担うであろう重要な資質能力の育成につながっていくと信じている。

（４）実践を振り返る（やらされる音楽・やる音楽）

プロのジャズベーシストである立花氏は，演奏にうまい下手はない，「音楽の時間」で重要なのはコミュニケーションであるという。また，浮々谷は精神医療を専門とする北海道浦河町の浦河ひがし町診療所で行われている「音楽の時間（後の PPE）」に年３回ほど参加し研究を重ねているが，その中で次のように述べている。多くのメンバーが「落ち着いてできればいい，いつも通りできればいい」というように，「今以上うまくしようとは思わない，楽しければいい」ということでほぼ一致している。仮に「うまくなること」を目指すと，楽器の扱いや演奏の技術のハードルが高くなり，うまい人に同調すべきであるという暗黙の圧力も生まれて参加者の「日常」から切り離された活動なりかねない。*2

学校における音楽も同じだと考える。自分から向き合ってこそ音楽のもつ本当の楽しさが感じられるのではないか。このような場の設定は，教師の役割のひとつでもある。子どもが没頭できゆったりと自分の音楽に浸れる時間こそ，学校で音楽を学習する意味だと捉えている。

【紹介】からだをつかって音楽する（低学年）

低学年では，からだ全体で活動することに重点を置いている。あそぶという活動を通して，様々なことを学んでいく。低学年の時に，からだを通して，たくさんのものを経験したからだは，高学年になって柔らかいからだに育つことが，過去の実践からも明らかになっている。高学年においての多様な音楽を受け入れたり，自分との異なりを受け入れたりと，音楽そのものを柔軟に受け入れることが出来るからだに育つのである。１年生から２年生へと進級しても，からだを使った学習を継続している。

①自分で選んだ曲をみんなで歌う活動

授業の始まりは，１グループ（４人）それぞれの子が歌集「歌はともだち」（教育芸術社）の中から歌いたい曲を選び，クラスみんなで歌う活動から始まる。子どもたちは，自分の順番が来る日を楽しみに待っている。そして，「今日は，どんな曲が出るのかな。」「多分あの子だから，あの曲だよ。」「やっぱりね。」など，子ども一人ひとりがこの活動に向け，思いを持って参加している姿が多い。経験を重ねるにつれ，その子らしさや選んだ背景までも感じ取ることができるようだ。毎回必ず同じ曲にこだわりを持って選ぶ子もいる。その様子をわかっている仲間もいる。自分が選ぶという行為には，様々なことが関係していることがみてとれる一場面である。その子自身を受け入れられる関係性が出来ていると言ってもよい。もちろん初めて出会う曲もある。そのような時，友だちの声を聴いて真似たり，楽譜を一生懸命見つめ，時には指でなぞりながら歌ったりする姿が多い。仲間がいるからこそ，成り立つ学びと言えよう。

②あそびを通して関係性が育まれる（わらべうたあそびを中心として）

入学して間もない時期の活動では，初めて出会う仲間と，手を取り合い，楽しそうにあそぶ姿もある一方で，新しい環境への不安を顔に出す子も少なくない。いざ一緒にあそび始めると，手をつなぐ安心感もあるのか，すぐに活動に参加できる。仲間とともに，声を合わせ，息を合わせ，うまくあそびが成立したとき，子どもの表情は非常に柔らかく，心地よさがみてとれる。子どもたちにとっては，わらべうたあそびだけがあそびではない。手拍子でのリズム学習や，オスティナートをつけて歌うこと等々，すべての活動が子どもにとってはあそびとしてからだに入っている。

わらべうたあそびは，導入当初はクラス全体で遊べるものから始め，徐々にグループでのあそびや少人数のあそび，人当てのあそびも取り入れていく。活動を重ねるなかで，当然もめ事も頻発してくる。そのときの子どもたちの関わり合いこそが大切だ。あそびのなかで葛藤を覚え，折り合いをつけることを学んでいく。他者がいることを意識する上では，大切な経験と言える。

２年生でもわらべうたあそびは継続している。２年生の２学期頃になると，自分たちであそびを変えて楽しむ姿も出てきた。わらべうたあそびは伝承あそびである。時に，子どもたちは，言葉を変えてあそんだり，フレーズを増やしてあそんだりもしている。現在を生きる子どもたちにあったあそびもあってよいと捉えている。今後，伝承していく過程で，変化を楽しみながら活動したい。

３　今後に向けて

一人ひとりの音楽が存在し，繰り返される音楽活動の中で，異なった表現が行き交う空間だからこそ触発されながらそのカタチを大きくしていくと捉え，実践を通して子どもの姿を追ってきた。５年目にあたる「“音楽すること”からひろがる・深まる」という研究テーマ。①「あそぶ・選択する」ことの中から育まれること②様々な楽器や音に出会うことで，個の音楽観の変容を追うこと③自分の音楽とは何か，考え表してみることの３点を，子どもの活動を通して多角的に分析をしてきた。今年度，自分で活動を創っていく時間をたっぷりと設定してきた中で，子どもたちの音楽的深まりやだけでなくひろがりも見えてきた。特に音楽会に向けての子どもたちの活動の様子からは，自らが自分の意思で音楽と向き合っている姿と言えるだろう。さらにそのような営みの中で，自分がやりたい音楽をみつけ，さらに興味を持つことから深まり，ひろがっていったのである。学習指導要領にもあるように，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する為には，この活動の有用性は大いにあると言ってもよいだろう。まずは自分が音楽することを楽しむ。時に仲間とともに創りあげる過程を楽しんだり，悩んだりする中で新しい発見をしていく。その発見を次に活かしていく。このような学びの経験は，音楽に限らずこれから先のあらゆる場面で生きてくるはずだ。今後は，この活動の有用性について，子どもの姿や教師の見とりから，さらに深く探っていきたいと考えている。

（下田・町田）

*1 クリストファー・スモール，野澤豊一＋西島千尋訳（2011）『ミュージッキング』水声社

*2 野澤豊一・川瀬慈編著(2021)『音楽の未明からの思考　ミュージッキングを超えて』アルテスパブリッシング,p60,63